# 初等理科教育冬季研修会　於：岡山ふれあいセンター　２００２．１２．２６

参加者　大木（牧石小）西本（附属小）松本（国府小）田辺（津島小）福井（伊島小）

初等理科教育研究会の冬季研修会が岡山ふれあいセンターで行われました。今回は午前中に発表が３題，午後は質疑応答とパネルディスカッションでした。

午前中の発表では，東会（平井小・岩井先生）が『授業改善に生かす評価の方法』と題して関心・意欲・態度の評価を取り上げ，火曜会（伊島小・濱本先生，浦安小・土井先生）が『理科学習における評価の工夫』と題して科学的思考の評価を取り上げました。評価というのは教育の中で最も重要な研究テーマのひとつですが，誰もが納得する方法が未だに存在していないというたいへん困難な分野です。その困難な分野に敢えて取り組んだと言うことは，それだけでも賞賛に値すると思います。

ただ，失礼な言い方であると自覚しながら敢えて言いますと，やはり今回の発表も本当の評価の研究にはなっていない，指導要録や通知表の評定のための客観的裏付けの研究に過ぎないと思うのです。評定の仕方というのは，それはそれで現場の教師にとっては大きな関心事であるので『客観的な評定の工夫』と銘打って発表していただければ有り難いことです。しかし，評価と題しているのであれば，根本的な視座が違うと言わざるを得ないのです。

評定というのは，学習材（学習内容とその配列）がドォーンと在り，その各段階に於いて子供が求めている能力（関心・意欲・態度，科学的思考，技能，知識・理解）にどの程度達しているか判断し，達していない子供には個別に対応していくためのものですね。悪い言い方をすれば，誰が落ちこぼれているかを調査するための方法だと思うのです。これに対し，福井の考える評価では学習材はとりあえずの仮ものであり，各段階に於いて子供達が十分に能力（関心・意欲・態度，科学的思考，技能，知識・理解）を発揮できているか調べ，もし子供達がその持てる能力を発揮できていないのであれば，学習材のどこが子供達を落ちこぼしているのか調査し，改善していくためのものだと思うのです。子供を直すのか学習材を直すのか，評価を語る以上，福井はどうしてもそのことにこだわっていきたいのです。

午後のパネルディスカッションのテーマは「理科って何？」であり，静観台からは松本先生が代表として出てくれました。理科の授業で大切にしたいことは何か，理科の問題解決と他の教科のそれとではどこが違うのか，楽しい実験・観察をさせるだけで本当に良いのか…など，短い時間でしたが理科の本質的な話がフロアーからも活発に出され，久々に刺激的な楽しい会でした。年齢や立場，地域の違う人がこれだけたくさん集まり，理科という共通の土俵で言いたいことを言うのはいいものです。松本先生がひとり空気鉄砲やペットボトルを取り出して話をし，机上の空論ではない実践者としての姿を示してくれたのは，今の静観台を表すものとしてたいへん嬉しく思いました。

**今回は差し障りのある内容が多くありますが，すべて伊島小・福井の独断であり，文責を負います。**